

アラビア語チュニス方言の事態の受容を表わす与格構文¹

熊切 拓

cyberbbn@gmail.com

キーワード: アラビア語方言 与格 意味論 語り 視点

要旨

本稿では、アラビア語チュニス方言の与格構文を取り上げた。チュニス方言の与格は、「動詞に関わる与格」と「文に関わる与格」の2種に分けることができる。「動詞に関わる与格」は、動詞の項として文の述べる事態を構成する与格である。これに対し「文に関わる与格」は動詞の項ではない与格である。この与格構文においては、事態と与格項との関係が表される。

「文に関わる与格」はさらに、当該の与格項を除いた文の述べる事態を与格項が受容する「事態受容の与格」と、事態を提示する「事態提示の与格」の2種に分けることができる。後者の事態提示の与格はしばしば心性与格と呼ばれるものである。本稿では前者の「事態受容の与格」について記述を行い、その意味解釈において、その与格構文が現れた文脈のみならず、語りの視点が与格項に置かれるか、主格項に置かれるかで意味解釈が異なることを指摘した。

1. 本稿の目的と概要

与格は、授与動詞などにおいて物などが与えられる受け手などを表すが、動詞との関係からだけでは解釈できない用法も存在する。こうした与格は心性与格（倫理与格）とも呼ばれ、印欧諸語のみならず、そしてヘブライ語やシリア語といったセム語においても観察される。同じくセム語に含まれるアラビア語方言においてもこうした与格は存在することは知られていたが、個々の方言におけるその用法が詳しく記述されるようになったのは、比較的近年になってからである。

本稿で取り上げるアラビア語チュニス方言においても、その与格の全体像を描く研究はない。そこで、本稿は、主として物語テキストを資料として、この言語の与格の用法、特に文に関係する与格（本稿では「文に関わる与格」と呼ぶ）について記述を行い、アラビア語諸方言の与格研究にひとつの資料を提供することを目的としている。

¹ 本稿は、第160回日本言語学会大会（2020年6月、オンライン開催）における口頭発表「アラビア語チュニス方言の情動的に余剰な与格」（『日本言語学会第160回大会予稿集』pp.181-187）を発展させたものである。発表において有益なコメントをくださった江畑冬生さん、本稿について有益なコメントをくださった西村義樹先生、田中太一さん、マルティネス・マンシア・アンドレス・エンリケさんに感謝を申し上げたい。また、本稿のための調査にあたり協力してくださった Farouk Herzi 氏と Khadija Chaieb 氏にも感謝を申し上げる。なお、本稿は科学研究費助成金（19K13183）による成果を含む。

本稿の構成は以下の通りである。本稿の目的と概要を述べる本節に続く、第2節においては、アラビア語チュニス方言の概要と本稿で扱う資料について述べる。第3節では先行研究をまとめる。第4節ではこの言語の与格の形態をまとめる。第5節では本言語の与格の概観を行い、本論となる第6節では、「文に関わる与格」のうち特に「事態受容の与格」について記述を行う。第7節は本稿のまとめと課題を述べる。

2. アラビア語チュニス方言の概要と資料

アラビア語チュニス方言（以下チュニス方言）は、アラビア語（アフロアジア語族のセム語派）の現代アラビア語諸方言、マグレブ方言のひとつであり、チュニジア共和国の首都チュニスを中心に広く用いられている。

29種の子音（b, m, f, θ, ð, t, r, d, n, s, s', z, r, f, l, f, j, ʒ, k, g, x, ɣ, q, h, ʕ, h, w, j）と、長短合わせて6種の母音（i, a, u, i:, a:, u:/）を持つ。

動詞は未完了形（IMPF）と完了形（PERF）の2つの活用の系列があり、人称・数（単数・複数）・性（ただし3人称単数のみ）によって活用する。なお、動詞の引用にさいしては、3人称単数男性完了形を代表形として示す。

名詞のクラスは男性（M）・女性（F）に分かれ、単数（SG）と複数（PL）の区別がある。名詞には格の標識はないが、人称接尾辞には対格形（ACC）と属格形（GEN）がある。名詞と人称接尾辞の与格（DAT）については第4節で述べる。

本稿の資料としては、筆者が聞き取り調査によって得たものに加えて、チュニス方言で書かれた『アル・アルウィー物語集』（Al-ʕArwi:, ʕAbd-al-ʕazi:z (1989) *hika:ja:t al-ʕArwi: Vol. I-IV. 2nd ed. Tunis: Al-Dar Al-Tunisi:ja li-l-Naʕr*）のテキストについての言語学的調査から得たものも用いた。後者からの引用文については訳文末の [] 内にローマ数字で巻数、アラビア数字でページ番号と行番号 (l) を記すことで、引用箇所を示した。

3. 先行研究

与格を含む文、すなわち与格構文は、個別言語の記述においても重要な一部をなし、また、さまざまな言語で重要な研究テーマとして扱われている（概観は藤村・井口・武本2001）。

与格研究においては、与格の用法にしばしば2つの区別がなされる。一番目は、動詞に関わる与格である。これは、動詞の項である与格、動詞の選択する与格、動詞に関わる与格などとも呼ばれる。二番目は、動詞に関わる与格以外の与格である。これは「動詞の選択する項ではない与格」（Bosse, Bruening and Yamada 2012, Camilleri and Sadler 2012）、「Extra-thematic な与格」（例えば Shibatani 1994）、文与格（例えば Draye 1996）、心性与格（例えば Leclère 1976、塩谷 1996、Lamiroy 1997、高田 2003）とも呼ばれる。これらの与格は共通して、文にある種の「情意」を付加するとみなされている。この情意とは、文を構成する諸要素のみからは導き出

すことのできない意味であり、具体的には、被害 (Shibatani 1994)、関心 (塩谷 1996、Choksi 2015)、受益 (Leclère 1976、Shibatani 1996)、驚き (Leclère 1976) などである。とはいえ、これらの二番目の与格の意味機能は、言語により、そして研究者により異なり、後に述べるように、本稿ではこの与格をさらに2つに分ける。

ここで、チュニス方言の与格研究を検討すると、この言語の与格は、次節で述べるように、前置詞 *l-* 《～に》との結合によって形成されるが、この前置詞自体の記述は先行研究に見られるものの (Singer 1984: 625、チュニス方言に近い Takrouna 方言の記述は Marçais et Guïga 1958-1961: 3552-3563)、これを与格として捉えた上で包括的に論じた研究はまだない。

いっぽう、他の方言では、シリア方言の「同一指示の与格 (the coreferential dative)」 (Al-Zahre and Boneh 2010) と、アラビア語方言のひとつであるマルタ語 (マルタ共和国) の与格 (Camilleri and Sadler 2012) に関する研究がある。シリア方言の「同一指示の与格 (主語に一致した与格が文中に現れるもの)」と同様な用法はチュニス方言には存在しない。マルタ語は、チュニス方言と系統的にも近いと考えられるアラビア語変種であるが、与格の用法には違いも見られる。

そこで、本稿はこれらの先行研究における与格の捉え方を参考にしつつ、チュニス方言の与格について議論を行う。

4. チュニス方言の与格とその形態

まず、この言語の格標示についてまとめる。古典アラビア語の名詞類における主格・対格・属格の格標示は、チュニス方言を含む多くの方言においては存在せず、格標識によって示されていた名詞と動詞との関係は、主格の場合は動詞との一致によって、対格の場合は、動詞に後続する目的語として示される。属格は古典アラビア語においては名詞と名詞、前置詞と名詞との関係を表していたが、これも目的語と同じく語順による関係表示、もしくは所有関係を表す前置詞 *mta:f-* 《～の》の使用に取って代わられた。

例外的に格関係が表示されるのが、人称接尾辞であり、対格と属格の2系列がある。

チュニス方言のこうした格の状況において、本稿が与格と呼ぶのは、空間的、時間的な目的や方向を表す前置詞 *l-* 《～に、～へ》によって形成される前置詞句である。本稿がこの前置詞句を与格として扱う理由は、すでに先行研究においてそのように扱われていること (シリア方言の Al-Zahre and Boneh 2010、マルタ語の Camilleri and Sadler 2012)、および、この前置詞句の用法が、すでに先行研究で述べられた印欧諸語の与格の用法と共通点を多く持つからである²。

この前置詞 *l-* には、名詞句もしくは属格人称接尾辞が後続する。本稿では、前置詞 *l-* と名詞句の結合体を、「与格名詞句」と呼び、*l-* と属格人称接尾辞との結合体を「与格人称接尾辞」

² チュニジアの Takrouna 方言でもすでに、前置詞 *l-* の記述において心性与格への簡単な言及がなされている (Marçais et Guïga 1958-1961: 3560)。

と呼ぶことにする（グロスでは、与格名詞句の場合は、前置詞 ɫ に、与格人称接尾辞の場合はこの接辞全体に対して、DATと示す）。与格人称接尾辞は動詞句、能動分詞に接尾される。

次に与格人称接尾辞の形態を、単数（1人称、2人称、3人称男性・女性）、複数（1人称、2人称、3人称）の順に記す。-li-, -lik-, -lu-, -(i)lha-, -(i)lna-, -(i)lkum-, -(i)lhum。括弧内の母音 i は、子音に接尾される時に挿入される母音である。また、前置詞 ɫ は、-r が先行する場合これに同化し、また、鼻音が後続する1人称複数の場合もこれに同化して、-(i)lna: > -(i)n-na: となることがある。ただし、本稿ではこうした同化を表記せず、形態論的な表記を維持する。

なお、前置詞 ɫ と属格人称接尾辞との結合には次の長形もある。li:-ja-, li:-k-, li:-h-, li:-ha-, li:-na-, li:-kum-, li:-hum。これは動詞に接尾されることのない形式であるため、本稿での議論からは除外する。

5. チュニス方言の与格の分類と概観

先行研究においては、与格の用法は2種に大別されることを、第3節で述べた。その分け方は、与格が動詞に関わるか、文に関わるか、によるものであるが、動詞に関わるとはどのようなことか、文に関わるとはどのようなことか、については言語により、また研究者により異なる。

本稿では、チュニス方言の与格を「動詞に関わる与格」と「文に関わる与格」の2種に分ける³。

チュニス方言の「動詞に関わる与格」とは、動詞の項として文の述べる事態を構成する与格である。この与格を、さらに6つに下位分類する。(i) 受け手の与格、(ii) 目的地の与格、(iii) 行為の方向の与格、(iv) 利益の与格、(v) 使役の与格、(vi) モダリティ表現の与格、である。

もうひとつの「文に関わる与格」とは、動詞の項ではない与格である。この与格は、動詞ではなく、その与格が現れた文に関わるが、その関わり方によって2種に分けることができる。ひとつは、当該の与格項を除いた文の述べる事態が与格項に与える影響を表す与格であり、これを本稿では「事態受容の与格」と呼ぶことにする。もうひとつは事態の提示に関わる与格であり、これを「事態提示の与格」とする。

そこで、チュニス方言の与格の全体を以下のように分類することができる。

(1) チュニス方言の与格の分類

I. 動詞に関わる与格

(i) 受け手の与格

³ これは、Draye (1996) のドイツ語の与格の記述において用いられた the adverbial dative と the sentential dative という用語を利用したものである。ただし、区別の基準は異なり、Draye は「所有者の与格」を「動詞に関わる与格」とみなすが、チュニス方言では、「文に関わる与格」に含めるほうが適当である。

- (ii) 目的地の与格
- (iii) 行為の方向の与格
- (iv) 利益の与格
- (v) 使役の与格
- (vi) モダリティ表現の与格

II. 文に関わる与格

- (i) 事態受容の与格
- (ii) 事態提示の与格

次に、上記の分類に基づき「動詞に関わる与格」について概観する。

「(i) 受け手の与格」は、物の移動を生じさせる意味をもつ他動詞の文において、物の移動を生じさせる行為者から、その物を受け取る受け手を表す与格である（これ以降、議論に関わりのある与格項を太字で示す）。

- (2) jaʕfi: l-mifta:h **l-marʕt-u:**
 与えるIMPF.3SG.M DEF-鍵 DAT-女-3SG.M.GEN
 「彼は妻（文字通りには「彼の女」）に鍵を与える」

「(ii) 目的地の与格」とは、移動動詞の目的となる場所や人を表す。

- (3) mja:w **l-ha:nu:t** il-ʕdu:l
 行くPERF.3PL DAT-店 DEF-公証人
 「彼らは公証人の事務所に行った」 [I-119, I.2]

「(iii) 行為の方向の与格」は、行為が向けられる対象を表す与格であり、発話に関する自動詞・他動詞が多く含まれる。主なものに qa:l l- 《～に言う》、ʕajjit l- 《～を呼ぶ、～に呼びかける》、hka:l l- 《～に～を語る》、ʃka:l l- 《～に～を訴える》などが挙げられる。

- (4) fi-θ-θni:ja qa:lt-**ilha:** l-aʕru:sa
 ～の中-DEF-道 言うPERF.3SG.F-3SG.F.DAT DEF-花嫁
 「道すがら、花嫁が彼女に言った」 [I-20, I.3]

「(iv) 利益の与格」を含む与格構文では、行為者がある行為を、与格によって示された存在の利益のために行うことが述べられる。

- (5) hallit il-ba:b l-xa:di:za
 開けるPERF.1SG DEF-扉 DAT-(女性の名)
 「私はハディージャのために扉を開けた（彼女が入れるように）」

「(v) 使役の与格」は、一部の使役構文においては被使役者を表す。

- (6) w-illa:ma: nwakkil l-bint-i: l-imlu:xi:ja
 そして-絶対に 食べさせるIMPF.1SG DAT-娘-1SG.GEN DEF-モロヘイヤ料理
 「そして、絶対に私は我が娘にモロヘイヤ料理をたべさせてやろう」 [I-156,1.8]

「(vi) モダリティ表現の与格」は、いくつかのモダリティ表現にみられる。(7) のモダリティ表現は、動詞 *ḍhar* を用いた非人称構文 *juḍḥur l-* 《(人) に～と思える》(形式的には3人称単数男性形の未完了形) である。この構文においては、推測の主体が与格項として現れている。なお、文頭の人称詞は与格項が主題化されたものである。

- (7) a:na: juḍḥur-li: ha:k-l-fu:qa:ni:ja mta:ʕ-ik amma: il-lu:ʔa:ni:ja:
 私 と 思える-1SG.DAT あの-DEF-上のも の-GEN.2SG しかし DEF-下のもの
 ma:kunt-ʃ fa:tʔin bi-ha:…
 NEG-(過去の助動詞)-IRR 気づく能動分詞.SG.M に-3SG.F.GEN
 「上にあるもの(カバン)があなたので、(中略)下にあるものにはあなたは気づいていなかったように、私には思える」 [I-198,1.11]

次節では、II.の「文に関わる与格」について「事態受容の与格」を中心に検討する。

6. 事態受容の与格

6.1. 文に関わる与格

「文に関わる与格」とは、動詞にではなく、文の述べる事態にかかわる与格である。この、文の述べる事態にかかわる与格には2種類のものがある。ひとつは、当該与格を含む文において、その与格を除いた文が述べる事態が、与格に与える影響を表すものである。この「影響」については後段で論ずるが、こうした与格を本稿では「事態受容の与格」と呼ぶことにする。

もうひとつの、文の述べる事態にかかわる与格とは、事態の内容ではなく、その事態そのものをどのように提示するかということを表す「事態提示の与格」である。この事態提示の与格は、2人称単数形 *-lik* のみが現れ、文の述べる事態を驚くべきものとして聞き手に提示する機能を持つ。(8)ではこの与格を訳の「なんと」で表した⁴。

⁴(8)は、熊切(2020)では言及されていないタイプの例である。ここでは事態提示の与格が通常の動詞とともに現れている。

- (8) za:d hfar jahfar jahfar hatta:
 さらに 掘るPERF.3SG.M 掘るIMPF.3SG.M 掘るIMPF.3SG.M ついに
 juxru3-lik s'andu:q
 出るIMPF.3SG.M-2SG.DAT 箱

「(寝ずの番をしている間に暇つぶしに彼は穴を掘っていると、板が現れる) さらに彼は掘った。掘って掘って、ついになんと箱が出てきた(箱には財宝が入っている)」

[III-144, l.10]

事態提示の与格の主要な用例と意味については、すでに「心性与格」の名称のもと、熊切(2020)で論じており⁵、本稿ではもうひとつの「事態受容の与格」を中心に扱うこととする。

6.2. 事態受容の与格の特徴と分類

「事態受容の与格」を含む文では、2つのことが述べられる。ひとつは事態受容の与格を除いた文が述べる事態である。もうひとつは、その事態が与格に与える影響である。これを、次の事態受容の与格の典型例で検討する。

- (9) hi:ja sarqit-lu: flu:s-u:
 彼女 盗むPERF.3SG.F-3SG.M.DAT お金-GEN.3SG.M

「彼女は彼に彼のお金を盗んだ」

(9)の例で述べられているのは、「彼女は彼のお金を盗んだ」という事態である。事態受容の与格をここでは「彼に」と訳し下線を付した(日本語としては不自然であるが、便宜上、以下の例の日本語訳においても事態受容の与格を同様に示す)。この与格によって表されているのは、もう一つのこと、つまり「彼」がこの文の述べる事態により影響を受けたことである。この影響は文脈により複数の解釈ができるが、与格の「彼」の立場から見れば「被害」とひとまず解釈できる。

この影響の解釈の分類について述べる前に、事態受容の与格の特徴について2点まとめる。まず、(9)についてもいえるが、事態受容の与格構文においては与格があたかも奪格として機能しているように見える場合がある。すなわち、この例でいえば、「彼に」ではなく「彼から」と逆向きに解釈することも可能かもしれない⁶。

しかしながら、奪格項に当たるものは、(10)のように前置詞 min- などによって示されるた

⁵ただし、動詞 qa:l とともに用いられる事態提示の与格が引用や説明の標示となる場合については補足する必要がある。

⁶同様な「逆向きの与格」は、フランス語 (Melis 1996: 45, (25))、ドイツ語 (Draye 1996: 202, (124a))、ラテン語 (Van Hoecke 1996: 6, (10)) にも観察することができる。

与格人称接尾辞が自動詞につくときは、与格項の表す存在が所有関係を持つのは主語である。

- (14) baʕdma: nrabbi:w w-nkabbru: tmu:t-ilna:?
 の後 育てるIMPF.1PLそして-大きくするIMPF.1PL 死ぬIMPF.3SG.F-1PL.DAT
 「わたしたちが育てて大きくした後に私たちに彼女(娘)が死ぬ(=娘に死なれる)だって？」 [I-278,1.8]

所有関係が目的語や主語とではなく、前置詞補語と結ばれる場合もある。

- (15) wahlitt-ilha: ju:ka mtaʕ-hu:t fi:-gra:zim-ha:
 引っかかるPERF.3SG.F-3SG.F.DAT 骨 の-魚 で-喉-3SG.F.DAT
 「魚の骨が彼女に彼女の喉に引っかかった=(彼女は喉に魚の骨が引っかかった)」
 [III-175,1.2]

とはいえ、事態受容の与格が文中の何らかの名詞句に対してもつ所有関係は、属格人称接尾辞によって明示されている必要はなく、文脈上明白であればよい。(16) はある漁師について語る場面から引用した例であり、文脈上、定冠詞で限定された網がその漁師のものであるのは明白である。

- (16) mʕa:hi: ʃ-ʃibka wahlit-lu: fi:-hazra w-tiqʕʕit
 でしょ DEF-網 引っかかるPERF.3SG.F-3SG.M.DAT に-石 そして-破れるPERF.3SG.F
 「その網が、(漁師である) 彼に石に引っかかって、破れたでしょ」 [II-287]

また、厳密には所有関係とはいえないが、人間どうしの関係(夫婦、友人関係、主従関係)においても、被害の解釈を生みうる。

- (17) qa:ʕdit-li: hatta-l-baʕd il-muyrib
 留まる.能動分詞SG.F-1SG.DAT まで-DEF-後 DEF-マグレブ
 「(お使いに出て戻ってこなかった召使いに怒って)あなたは、(主人である) 私にマグレブ(夕刻)の後まで、とどまっている(=私はあなたにマグレブの後まで待たされた)」 [IV-327,1.7]

与格項が文中のいかなる要素に対しても所有関係を持たない場合もある。そうした場合、与格視点の事態受容の与格構文は、事態が与格に与える影響の強さを表す。与格の表す存在が文の表す事態に対する制御力を持たないということは、見方を変えれば、事態そのものが与格の表す存在を圧倒するほどの強い力をもつということにもなるからである。(18) では、イチジク

害による困惑が読み取れることもある。(21) は前者、(22) は後者である。(22) では、家の主人の不在に、その家の食事を勝手に食べて、家の主人に被害を与えることについて、主格の「私」が感じている決まり悪さが表明されている。

- (21) nqus^su:-lha: r'a:s-ha:
切るIMPF.1PL-3SG.F.DAT 頭-3SG.F.GEN

「私たちは彼女に彼女の首を切るだろう＝私たちは彼女の首を切つてやる」 [I-59,1.1]

- (22) mu:la-d-da:r^f ya:jib w-a:na: na:kul-lu: ʕja:
主人-DEF-家 不在だ.能動分詞SG.M そして-私 食べるIMPF.1SG-3SG.M.DAT 夕食

「家の主人がいないのに、私は彼に (彼の) 夕食を食べている」 [II-013,1.15]

恩恵の付与と加害の解釈は、視点の違いによって生まれるのではなく、文脈によって決まる。(23a, b) はどちらも構造的には同一だが、「貧困 (を擬人化した存在)」が与格の人物に害をなし、「幸福 (を擬人化した存在)」が与格の人物に益をなすという文脈で語られるため、(23a) は加害、(23b) は恩恵の付与と解釈されることとなる⁸。

- (23) a. w-l-faqr ra:kib-lu: ʕla:-kta:f-u:
そして-DEF-貧困 乗る.能動分詞SG.M-3SG.M.DAT の上に-肩PL-3SG.M.GEN

「そして、『貧困』は彼の両肩の上に乗っかっている」 [I-355,1.5]

- b. w-s-saʕd m'a:hu: qa:ʕid-lu: ʕla:-kta:f-u:
そして-DEF-幸福 のだ 座る.能動分詞SG.M-3SG.M.DAT の上に-肩PL-3SG.M.GEN

「そして『幸運』が彼の両肩の上に座っているのだ」 [I-359,1.1]

主格視点の事態受容の与格構文では、主格の存在がその与格の存在を目当てにして行為を行うことが示されるため、その結果、行為の意図性もまた強調されることになる。(24) は、事態受容の与格と、動詞に関わる与格の「(ii) 目的地の与格」とがともに現れる例である。目的地の与格は動詞「登る」の目的地「ミナレット」を示し、事態受容の与格は、そのミナレットにいる「彼」という目当てを示す。これにより、文全体としては、「彼のいるミナレットに登って行く」、より具体的には「彼に会うという意図をもってミナレットに登って行く」という行為の意図性が強調されることとなる。

- (24) ʕlaʕ-lu: l-is^s-s'umfa
登るPERF.3SG.M-3SG.M.DAT DAT-DEF-ミナレット

「ジュハーは彼のいるミナレットに登って行った」 (Stumme 1893: 78, 表記は筆者が改

⁸ この恩恵の付与と「(iv) 利益の与格」とは意味的に重なる部分があるが、「(iv) 利益の与格」がいかなる文脈でも利益と解釈されうるのに対し、恩恵の付与という解釈は文脈次第である、という点で違いがある。

あり、発言者である家の主人が主格となる主格視点の文である。この文で表明されているのは家の主人の加害意識であり、それに対応して、この文の直前に謝罪の言葉が述べられている。

- (27) a. na:qt-i: jiöbh-ha:-li:
 雌ラクダ-1SG.GEN 屠るIMPF.3G.M-3SG.F.ACC-1SG.DAT
 「私の雌ラクダを彼が私に屠る（＝私の雌ラクダが彼に屠られる）」 [III-385,1.16]
- b. ilba:rah öbaht-lik na:qt-ik
 昨日 屠るPERF.1SG-DAT.2SG 雌ラクダ-GEN.2SG
 「（すいません。）昨日、私はあなたに雌ラクダを屠った」 [III-386,1.12]

(28a, b) はそれぞれ別の物語からのものであるが、意味的には対比的に捉えることができる。(28a) では、与格である「彼」に視点が置かれている。これは、『幸運』の力（例文 (23b) を参照されたい）によって貧しい身から名士となった彼が、城に行つて、人々が自分を恭しく待ち構えているのを目撃する場面からの一節であるが、ここでは事態受容の与格は、その目撃者の驚きを表示するのに用いられている。いっぽう、(28b) は、主格視点の文である。ここでは動詞の主格人称の指示する「彼（裁判官）」が高貴な客が来たと聞き、彼を恭しく出迎えるべく、立ち上がり、扉のところで立って待ち受ける様子が描かれている。

- (28) a. il-mʕi:na:t waqfu:-lu: b-sʕ-sʕaff
 DEF-従者PLたち 立つPERF.3PL-3SG.M.DAT で-DEF-列
 「従者たちが列をなして彼に立った」 [I-359,1.14]
- b. w-qa:m wquf-ku: fi-l-ba:b
 そして-立ったPERF.3SG.M-3SG.M.DAT の中-DEF-扉
 「そして彼（裁判官）は立ち上がり、彼（高貴な客）に扉のところに立った」
 [II-311,1.12]

(27a, b) も (28a, b) も、それぞれの2つの文は語彙的にも構造的にもほぼ同じであるが、語りの視点が異なると、それぞれの解釈もまた異なってくることを、本節では示した。

7. まとめと課題

本稿では、アラビア語チュニス方言の与格構文を取り上げ、その用法を以下のように分類した（(1)を(29)として再掲、それぞれに該当する主な例文番号を示した）。

(29) チュニス方言の与格の分類

I. 動詞に関わる与格

(i) 受け手の与格 (2)

- (ii) 目的地の与格 (3)
- (iii) 行為の方向の与格 (4)
- (iv) 利益の与格 (5)(11)
- (v) 使役の与格 (6)
- (vi) モダリティ表現の与格 (7)

II. 文に関わる与格

- (i) 事態受容の与格 (以下の(30)を参照のこと)
- (ii) 事態提示の与格 (8)

これらの与格の用法のうち、本稿は文に関わる与格の事態受容の与格について意味記述を行い、その意味解釈には、語りの視点が関与していることを明らかにした。これをまとめると次のようになろう（それぞれに該当する主な例文番号を示した）。

(30) 事態受容の与格の意味解釈

a. 語りの視点が与格に置かれる場合（与格視点）：

与格が受ける被害（(12)～(17)）、与格が事態から受ける影響の強さ（(18)）

b. 語りの視点が主格に置かれる場合（主格視点）

与格への恩恵の付与（(19)(20)）、与格に対する加害（(21)(22)）、行為における主格の意図の強調（(24)(25)）、行為からの与格の排除（(26)）

語りの視点とは、単に語りにおける中心的存在を意味するのではなく、話し手にしてみれば語りをよりわかりやすく、より効果的に行うために用いる手段となり、また、聞き手にしてみれば、語りを理解し、楽しむための手がかりとなるという語りの機能を持つ。本稿が明らかにしたのは、こうした視点を抜きにしては、事態受容の与格構文の意味の解釈を行うことはできないということである。

とはいえ、語りの視点については、さまざまな文脈を考慮にいれ、より厳密に定義する必要がある。そして、この定義を踏まえた上で、事態提示の与格を含んだ「文に関わる与格」が語りにおいて果たしている機能を、語りという観点からより包括的に記述することを、今後の課題としたい。

略号

本稿のグロスで用いる略号は次の通りである。1, 2, 3: 1人称・2人称・3人称、ACC: 対格人称接尾辞、DAT: 与格人称接尾辞、DEF: 定冠詞、F: 女性、GEN: 属格人称接尾辞、IMPF: 未完了形、IMPR: 命令形、IRR: 非現実モダリティ辞、M: 男性、NEG: 否定、PERF: 完了形、PROG: 進行アスペクト標識、PL: 複数、SG: 単数、-: 形態素境界。

参考文献

- Al-Zahre, Nisrine and Boneh, Nora. (2010) Coreferential Dative Constructions in Syrian Arabic and Modern Hebrew. *Brill's Annual of Afroasiatic Languages and Linguistics* 2, 248-282.
- Bosse, Solveig, Bruening, Benjamin and Yamada, Masahiro. (2012) Affected Experiencers. *Natural Language & Linguistic Theory* 30/4, 1185-1230.
- Camilleri, Maris and Louisa Sadler (2012) On the Analysis of Non-selected Datives in Maltese. In: *Proceedings of the LFG12 Conference*, ed. Miriam Butt and Tracy Holloway King. University of Essex. CSLI Publications. <http://csli-publications.stanford.edu/>.
- Choksi, Nishaant (2015) Toward a Typology of Concern: A Reanalysis of the Ethical Dative in Relation to Possession. 『東京大学言語学論集』 36. 1-14. 東京：東京大学言語学研究室.
- Draye, Luk (1996) The German dative. In: *The Dative Volume 1 Descriptive Studies*, ed. Van Belle, William and Willy Van Langendonck, 155-215. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 藤村逸子・井口容子・武本雅嗣 (2001) 「与格研究」 『フランス語学研究』 35, 74-86. 日本フランス語学会.
- 熊切拓 (2020) 「アラビア語チュニス方言における2人称単数の心性与格用法の意味」 『日本エドワード・サピア協会研究年報』 34, 23-32. 日本エドワード・サピア協会.
- Lamiroy, Béatrice (1997) On the Relation Between the possessive dative and the ethical dative. *Revue Roumaine de Linguistique*. 223-247. https://www.researchgate.net/publication/303987694_On_the_relation_between_the_possesive_dative_and_the_ethical_dative
- Leclère, Christian (1976) Datifs syntaxiques et datifs éthiques. In: *Méthodes en grammaire française*, ed. J.-C. Chevalier and M. Gross, 73-96. Paris: Klincksieck.
- Marçais, William and Guîga, Abderrahmân (1958-1961) *Textes arabes de Takroûna II. Glossaire*. Paris: Bibliothèque de L'École des Langues Orientales Vivantes.
- Melis, Ludo (1996) The dative in Modern French. In: *The Dative Volume 1 Descriptive Studies*, ed. Van Belle, William and Willy Van Langendonck, 39-72. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Shibatani, Masayoshi (1994) An Integrational Approach to Possessor Raising, Ethical Datives, and Adversative Passives. In: *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. 20. 461-486. Berkeley: Berkeley Linguistics Society.
- Shibatani, Masayoshi (1996) Applicatives and Benefactives: A Cognitive Account. In: *Grammatical Constructions: Their Form and Meaning*. ed. Shibatani, Masayoshi and Sandra A. Thompson. 157-194. Oxford: Clarendon Press.
- 塩谷幸子 (1996) 「mirは心態詞なのか：関心の与格の場合」 『独語独文学科研究年報』 23. 1-14. 札幌: 北海道大学ドイツ語学・文学研究会
- Singer, H-R. (1984) *Grammatik der Arabischen Mundart der Medina von Tunis*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Stumme, Hans. (1893) *Tunisische Märchen und Gedichte: Eine Sammlung prosaischer und poetischer Stücke im arabischen Dialekt der Stadt Tunis nebst Einleitung und Übersetzung*. Leipzig: J.C. Hinrichs'sche Buchhandlung.
- 高田大介 (2003) 「フランス語の心性与格」 『フランス語学研究』 37. 19-33. 東京: 日本フランス語学会

Van Hooeke, Willy (1996) The Latin dative. In: *The Dative* Volume 1 Descriptive Studies, ed. Van Belle, William and Willy Van Langendonck, 3-37. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

The Meaning of the Dative of the Affectee in Tunis Arabic

KUMAKIRI Taku

Keywords: Arabic Dialect, Dative, Semantics, Narrative, Viewpoint

Abstract

This paper focuses on the dative constructions in Tunisian Arabic. After defining the preposition *l-* “to” as a dative maker, I classify the uses of the dative in this language into two kinds: the verbal dative and the sentential dative. While the verbal dative constitutes a verbal argument, the sentential dative does not, instead modifying the sentence containing it. The sentential dative has two subgroups: the dative of the affectee and the presentative dative (the ethical dative). The latter part of the paper is devoted to the description of the three major meanings of the dative of the affectee: the adversity reading, the benefactive reading, and the impact of the event. I also point out that the narrative viewpoint plays a crucial role in differentiating the meanings of the dative of the affectee.

(くまきり・たく 東京大学大学院人文社会系研究科研究員)